花は（係助）盛りに（形動ナリ・用）、月は（係助）くまなき（形ク・体）を（格助）のみ（副助）見るものかは（係助）。

雨に（格助）向かひて（四段・用）月を（格助）恋ひ（上二・用）、たれこめて（下二・用）春の（格助）行方

知らぬも（打消「ず」体・係助）、なほあはれに情け深し（形ク・終）。咲きぬべきほど（強意「ぬ」終・推量「べし」体）

の（格助）梢（こずゑ）、散りしをれたる（存続「たり」体）庭など（副助）こそ（係助）、見どころ

多けれ（形ク・已）。歌の（格助）詞書（ことばがき）にも（係助）、「花見に（格助）まかれり（完了「り」用・過去「けり」体）ける

に（接助）、早く（形ク・用）散り過ぎ（上二段・用（複動））にけれ（過去「けり」已・完了「ぬ」用）ば（接助）。」とも（格助）、「さはること

ありて（ラ変・用）、まから（四段・未）で（接助）。」など（副助）も（係助）書け（四段・已）る（存続「り」体）は（係助）、「花を（格助）

見て（接助）。」と（格助）言へる（四段・已）に（格助）劣れ（四段・已）ること（格助）かは（係助）。花の（格助）散り（四段・用）、

月の（格助）傾く（四段・体）を（格助）慕ふ（四段・体）ならひ（接助）はさる（ラ変・体）ことなれど（断定「なり」已・接助）、ことに（副詞）

かたくなる（形動ナリ・体）人ぞ（係助）、「この（格助）枝、かの（格助）枝、散りに（完了「ぬ」用）

けり（過去「けり」終）。今は（係助）見どころなし（形ク・終）。」など（副助）は（係助）言ふめる（婉曲「めり」体・四段・終）。

よろづの（格助）こと（係助）も、初め終はりこそ（係助）をかしけれ（形シク・已）。

男・女の（格助）情け（係助）も、ひとへにあひ見る（上一・体）を（格助）は（係助）言ふもの（四段・体）

かは（係助）。あはでやみにし（接助・完了「ぬ」用・過去「き」体）憂さを（格助）思ひ（四段・用）、あだなる（形動ナリ・体）契り

を（格助）かこち（四段・用）、長き夜を（格助）ひとり明かし（四段・用）、遠き雲居を（格助）

思ひやり（四段・用）、浅茅（あさぢ）が（格助）宿に（格助）昔を（格助）しのぶ（四段・体）こそ（係助）、色好む（四段・終）と（格助）

は（係助）言はめ（四段・未）。（係助・推量「む」已）

桜の花は満開の時、月はかげりのない満月の時に
だけ見るものだろうか（いや、そうではない）。
雨に向かって（見えない）月を恋しく思い、すだれ
を垂らした部屋にこもって春が移ろいゆくのを
知らずにいるのも、やはりしみじみとして趣深い。
今にも咲きそうな
（桜の）梢や（花が）散りしおれてしまった庭などに
こそ見どころが多い。
和歌の詞書にも、「花見に参りましたところ
すでに散ってしまっていたので。」とも、「さしつか
えることがあって、
（桜を見に）参らずに。」なども書いているのは、
「桜を見て（詠んだ歌）。」と書いてあるのに劣ってい
るだろうか（いや、劣ってなどいない）。桜が散って、
月が沈むのを恋い慕う（惜しむ）ならわしはもっとも
なことであるが、特に
情緒を理解しない（無教養な）人が、「この枝も、あ
の枝も散ってしまった。
今はもう見所はない。」などと言っているようだ。

何事も、初めと終わりが趣深いものだ。
男女の恋愛も、ひたすら会うことを言うものか（い
や、そんなことはない）。
会うことが出来ずに終わってしまった（恋の）辛さを
思い、はかなく果たされなかった約束を嘆き、
長い夜を一人で明かし、はるか遠くにいる恋人を
思いやり、浅茅の生い茂った荒れた家で昔（の恋
人とのことを）を思い出すことこそが、恋愛の情
緒を理解するのだと言うのだろう。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/